



Title	東大阪市におけるエイズ対策の取り組み
Author(s)	大野, 桂子
Citation	大阪公衆衛生. 2009, 80, p. 19-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83421
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

については利便性や周辺の環境が影響することを実感しました。今後、受け入れ検査数を増やしていくために検査方法の見直し、検査会場、委託先について検討していく予定です。

【啓発について】

保健センターでは従前より学校保健と地域保健の連携を目的に学校等での健康教育等を行っており、性に関しての題材の中でエイズについても取り上げています。平成19年度にエイズ感染症対策が重点施策にあげられた際に、小・中・高校生、大学生、教職員、PTA等に対するエイズ啓発のために外部講師を依頼する予算が計上され、NPO等の協力を得ながら講演・研修会を開いています。特にNPOに依頼しているプログラムでは学生等のボランティアによるグループワークを取り入れており、対象者にとっては近い年齢でより身近な話として考えてもらえるような内容になっています。

一般にはリーフレットの配架、電話相談等で保健センターでの啓発が中心となっていますが、保健所では12月の世界エイズデーに合わせてエイズ予防週間実行委員会の啓発以外に市庁

舎でパネル展示による啓発活動も行っています。しかし、感染リスクの高い男性の同性愛者に対するターゲットを絞った啓発については全く手付かずの状態です。今後の課題と言えます。

【おわりに】

全国的にHIV検査の受検者数が増加し、即日検査の導入によって人口の多い大都市では検査件数が飛躍的に伸びている中で、堺市もいかに件数を増やしていくかが大きな課題です。堺市は集客力のある繁華街、商業施設のある大阪市の隣に位置し、人の流れ(特に若い人達)がどうしても堺市を通過してしまうのはやむを得ません。

しかし、即日検査を定着させ、さらに土曜日曜、夜間検査へと検査の機会を拡大させること、感染リスクの高い人達への啓発、青少年への普及啓発、情報発信の強化等まだまだ遅れている現状を検討し、積極的にHIV対策を進めていかなければなりません。

トピックス HIV/AIDS

東大阪市におけるエイズ対策の取り組み

東大阪市保健所 健康づくり課

保健師 大野 桂子

1 HIV相談・検査の状況

① 検査体制

通常の検査は3保健センターで各センター月2回、平日の午前中に匿名、無料で実施している。検査結果は約1週間後に来所にて伝えている。HIV検査以外に梅毒反応検査と平成19年3月より性器クラミジア抗原検査を実施しており、HIV検査を目的に来所した人にも他の性感染症検査の必要性を説明し検査を勧奨している。

通常の検査以外に年2回、HIV検査普及週間(6月)と世界エイズデーの時期(12月)に

夜間検査を実施している。平成19年12月からは即日検査を導入し夜間即日検査として実施している。

スタッフの体制としては、3保健センターとも保健師が検査の前後に相談(カウンセリング)を行っている。陽性者には医師と保健師が面接して結果を伝えている。希望者には保健師が同伴受診等のサポートをしている。

② 受検者数

平成15年は193名だったが平成19年には270名となり毎年少しずつ増加している。

平成 19 年度の受検者を年齢別にみると 20 歳代が一番多く全体の 33.4%、次いで 30 代 32.7%、40 歳代 16.3% の順になっており、10 歳代は 3.7% となっている。男女比では男性の方が女性の 1.5 倍多い。

なお、陽性者は平成 17 年以降毎年 1 名ずつあり医療機関に繋いでいる。

③ 課題と対応

平成 19 年 12 月に即日検査を導入する際、HIV と人権・情報センターのカウンセリング研修を保健師研修として実施した。当初は夜間即日検査のみ VTC (Voluntary Counseling and Testing) の手法を取り入れていたが、通常検査でも検査前、検査後のカウンセリングの必要性を感じ、今年度より部分的に取り入れている。その結果プライバシーやセクシャリティへの配慮がよりできるようになり、予防行動についての話もしっかりできるようになったと感じている。

HIV 検査は担当制になっており担当の保健師が対応するのみであり、また陽性者へ対応した経験を持つ保健師も少ない。そのため誰もが適切に対応できるよう帳票類の整備やマニュアルを現在作成しているところである。

受検者数をさらに増やしていくためには検査の時間帯や曜日、回数等の検討が必要であるが予算や体制の問題もあり今後の課題である。

2 若者への啓発について

東大阪市では検査・相談の充実にむけての検討やマニュアル作成を行っている段階で啓発についてはまだ十分に実施できていない現状である。

小・中・高校生への啓発は思春期教育という形で母子保健の中に位置づけられており、学校からの依頼等に各保健センターの保健師が養護教諭等と協力し実施している。

大学生については市内の 5 つの大学に対し、平成 19 年度は 4 大学を保健所健康づくり課の医師と保健師が訪問し HIV・エイズの現状や保健所の取り組みを説明し、世界エイズデーの期間には保健所の HIV 検査案内やパンフレットを置いてもらった。その中で K 大学では健康管理センターの医師が顧問を務める学内の赤十字奉仕団を紹介してもらうことができた。

K 大学赤十字奉仕団は、主に学内における献血推進活動、養護施設、病院への訪問等を定期的に行っているボランティアグループである。今年度は奉仕団から大学祭で HIV 検査を実施したいので協力してほしいとの申し出があったが、大学の許可がでず、学内での検査は実現しなかった。しかし昨年のかかわりが引き継がれていることがわかり、HIV・エイズについて基本的な知識を学ぶ場ができないか学生に提案したところ、奉仕団のミーティングの時間に「HIV とエイズの違い、日本や世界の現状、治療、予防について」保健師が講話を実施することができた。講話の後、大学生の意識を知るために簡単なアンケートを実施した。結果は以下のとおりである。

<アンケート結果>

- ① 回答者の概要 () は %
- ・回答率 32 名 / 33 名 (96.9)
 - ・学年別 1 回生: 7 名 (21.8) 2 回生: 11 名 (34.3) 3 回生: 5 名 (15.6) 4 回生: 9 名 (28.1)
 - ・性別 男子: 24 名 (75) 女子: 8 名 (25)
- ② 今まで HIV・エイズについて知識を得たことがあるか?
- ・ある: 27 名 (84.3) 小・中・高校の授業が圧倒的・TV ドラマ・ネット
 - ・ない: 5 名 (15.6)
- ③ 今回の話を聞いて HIV・エイズのイメージがかわったか?
- ・変わった: 23 名 (71.8) ・いいえ: 9 名 (28.1)

表 1

どう変わったか
HIV 感染＝死というイメージを持っていたが、治療をすれば長生きできる。
HIV とエイズの違いが理解できた。
学習していたことを全く忘れていたが、いろいろな知識が得られた。
自分とは関係ないと思っていたが、身近なものとして考えていきたい。
自分も感染する可能性がある病氣。
少し怖いイメージがあったが、自分でリスクをある程度コントロールできると思った。
大学生で学びなおすことで、予防する意義というものが伝わった。
男女比に差がないと思っていたが、男性同士の感染が多くて驚いた。

いいえと答えた学生の多くが知っている内容だったと答えている。

- ④ 今まで HIV・エイズについて、パートナーや友人と話したことがあるか
- ・ある: 10 名 (31.2) ・ない: 21 名 (65.6)
 - ・未記入: 1 名 (3.1)
- ⑤ 今後 HIV・エイズについてパートナーや友人などと話をしようと思うか
- ・思う: 24 名 (75) ・思わない: 7 名 (21.8)

- ・未記入：1名(3.1)
- ⑥赤十字奉仕団としての取り組みの案がある
- ・ある：20名(62.5)　　・ない：10名(31.2)
- ・未記入：2名(6.2)

表 2

表2 具体案
学内で講演会等の取り組みを行い、他の学生にもHIVやエイズについて知ってもらおう。
学園祭で取り組む。
献血を行なう時資料を配布したり、献血バスにポスターを貼らせてもらう。
赤十字社の研修プログラムに入れてもらう。
学内での検査の実施。
同世代の人や自分たちより若い人に話しをしてみたい。
無料でコンドームを配布する。
保健所の方々と一緒に、エイズや性感染症に繋がる活動を是非やってみたいと思う。

⑦ 全体を通しての感想(抜粋)

表 3

表3
エイズのことを勉強する機会がないので、今回の講話は非常に勉強になった。
エイズのことを知らない、関心がない人がたくさんいるので、そういった人たちに知ってもらおうと私たちが何か努力していかなければならないと思った。
今回得た知識を、家族や友人に広めようと思う。
HIV感染者が年々増加していることに驚いた。誰もが感染する可能性があるということを知る必要があると思う。
身近に感染している人がいるかもしれないし、いつか私も感染するかもしれない。そう思った時エイズ・HIVのことを理解していたら、自分が出来ることが増えるのではないかと考えさせられた。
性器に口をつける行為でも感染する可能性があることに驚いた。エイズを身近に感じた。周りにもエイズを止められるよう働きかけようと思った。

数が少ない上、特定のグループのアンケートのため全ての学生の傾向を反映しているとはいえないが、保健所として今回初めて大学生の意識を知ることができた。

ほとんどの学生が小・中・高校時代にエイズ・HIVの話を知っていたが、「死に至る怖い病気」、「HIV感染とエイズは同じ」といった知識の学生が大半だった。大学生は、基礎的知識をもっていると思っていたが、環境が大きく変わる中で学んだ知識が忘れられていることがわかった。大学生にもHIVやエイズについて正しい知識や予防について知ってもらう機会が必要だと感じた。

大学生になると個人差はあるが、高校生の頃より性はより身近になり、「自分も感染する可能性のある病気」として感じるようになった。感染予防の話についても高校生時代は実感として感じられず聞き流した内容も、「予防の意義を理解できた」とあるように自分の問題としてとらえられている学生もいた。

また彼らが献血の推進活動をしていることもあり、エイズ検査を目的に献血を受けに来る人がいることや、献血者のHIV陽性者が全国で大阪が一番多い等の話を盛り込んだ。そのことで今行っている活動とHIVやエイズの問題が結び

ついた学生もいた。

話の最後に保健師よりピアカウンセリングについて説明し、同世代の人からのメッセージは身近な問題として伝わっていく、できることから行動をしてほしいとメッセージを伝えた。

保健師の話は1時間ほどであったが、学生はこちらの予想以上に熱心に話を聴いてくれ、自分なりの考えを示してくれた。

アンケートの回答からはエイズについて活動していきたいという前向きな回答が多くみられ、きっかけの欲しかった私達にとってうれしい反応だった。学生たちのこの気持ちを大切にし、新たな活動に繋げていきたいと思っている。さらにその活動がK大学内だけにとどまらず、他の大学や地域へ活動が広がっていければと考えている。

3 まとめ

東大阪市では、3保健センターで行っていた結核・感染症業務を、平成18年度に保健所に集中化した。それに伴い、ようやくHIV相談の見直しやエイズ啓発事業の取り組みを始めたところである。

他市に比べ取り組みはこれからだが、地域の資源を生かしながら、地域の状況に見合った対策を考えていきたいと思う。